

A close-up photograph of a bouquet of yellow roses. The roses are in various stages of bloom, with some fully open and others as buds. They are wrapped in white paper with a subtle orange and yellow gradient. The background is a plain, light-colored surface.

素直になれば

キミイ

麻那加は秋刀魚の目をじっと見る。

赤く充血しているものは避け、青い目の秋刀魚を選びトングで二尾選び、備え付けの青い透明のビニールに入れて口を結んだ。

麻那加は大根を買うのも忘れなかった。

スーパーを出ると買った袋を自転車の前の籠に入れゆらゆらと揺れながら、自宅に戻った。

オレンジ色に染まる空は高かった。

夜7時半を過ぎた頃、玄関は開かれる。

ガチャリと言う音の合図と共に、麻那加は秋刀魚を焼き始めた。

リビングのドアが開くと「ただいま」と亮が言う。

麻那加も「おかえりなさい」と答える。

亮が着替えに寝室へ行くと、麻那加は秋刀魚を裏返した。

亮がリビングに入って来ると、麻那加は他のおかずを並べる。

亮は黙って冷蔵庫からビールの缶を取り出し、麻那加が出してやったグラスになみなみと注ぎ一口飲み、ぷはあと言った。

先に出された煮物を一口頬張り咀嚼する。

そしてテレビのリモコンを手にし、一通りのチャンネルを押し、ようやく一つのチャンネルに定まる。

その頃ようやく焼けた秋刀魚を亮の前に麻那加は置いた。

麻那加は自分の白米だけをよそいようやく席に座り食べ始める。

部屋はテレビの音だけが鳴り響いていた。

麻那加が後少しで食べ終わろうとするところ、決まって亮は「飯」と言う。

麻那加は後二口程の白米をお茶碗に残し立ち上がる。

麻那加の茶碗より幾分大きめの茶碗に一膳盛り、亮に差し出す。

亮は黙って受け取り、秋刀魚を上手く取り分けながらそれらを食した。

麻那加は中断された残り二口の白米は食べる気が失せ、そのまま席に座らず、茶碗と箸を流しへ持って行った。

亮は黙って浴室に向かう。

麻那加はその間食卓の片付けをした。

亮の風呂は早い。

麻那加がようやく片付け終わった頃に、スタスタとリビングに戻ってきて、ソファーにずっしりと座りテレビの続きを見る。

麻那加も湯が冷めないうちに浴室へ向かい入浴した。

湯船で麻那加は大きく息を吸って吐き出した。

夜7時半から麻那加はまともに息をしていなかったからだ。

こんなふうに息苦しさを感じ始めたのはかれこれ三ヶ月前からだ。

麻那加が亮と夫婦になったのは5年前程だ。

お互いの友人を通して知り合い、約二年交際しゴールインした。

結婚して最初の三年は共働きだったが、なかなか子供ができず、麻那加が本気で子供を欲しがるようになり、不妊治療の為通院しだし、本格的に小作りする為に退社した。

この不妊治療は意外と面倒で、毎日基礎体温を計り、この日という日に実行しなければならない。

何の雰囲気もない、的に当てるような性交が毎月続いた。

それでも子宝に恵まれず亮まで、病院で精子を調べられた。

亮は問題がない事が判明し、次の治療は排卵誘発剤とやらを麻那加が毎月注射した。

麻那加は痛みに耐え、毎月のように打ったが不妊治療一年半を経て挫折した。

亮は味気ない行為にうんざりし、麻那加は自己管理と痛みの強い注射に限界だったのが原因だ。

お互い子供は諦めようと話し合い納得した。

亮は解放された気分だったが、麻那加は違った。

自分に原因があると自己嫌悪に陥った。

最初は亮も麻那加を慰め、思い遣りもしたが、麻那加に夜も拒絶された。

何度誘っても嫌がる麻那加に亮は段々と触れる事も出来なくなってきた。

そのうち会話も乏しくなり日々悶々と暮らす毎日が始まった。

そんな暮らしになってもう半年過ぎようとしていた。

三ヶ月前の事だった。

麻那加が久しぶりに友人の美咲とランチした時の事だった。

ランチを済ませた後、コーヒーを飲みながら美咲と会話していた時、何気に向かい側のカフェが目に入った。

そのカフェの窓際のテーブルに女性と夫である亮が楽しげに会話しているのを偶然にも目撃してしまった。

女性は知的な雰囲気若く美しい人だった。

麻那加は全身が震えだした。

麻那加の異変に気づいた美咲は何度も「どうしたの？」と聞いたが、麻那加は答えなかった。

ただひたすら拳を握り締め震えていた。

美咲は体調が悪くなったと思い、「帰った方がいい」と勧め、店を出て自宅まで送ってくれた。

麻那加は窓際の二人をじっと最後まで見ていたが、美咲はそれに気がつかなかった。

麻那加は亮を責める事ができなかった。

自分から拒絶していたのに責める事は理不尽だと思った。

ただどこかで怒りを感じそれが態度となり益々二人の距離は広がるばかりだった。

こんな生活長くは続かない。

麻那加は息詰まる二人の生活に終わりを感じ始めていた。

夜、麻那加がベッドに入ると既に亮は寝息を立てて寝入っていた。

隣の亮に目をやると背を向けて顔が見えなかった。

麻那加はもうこの人は二度と私の方を見ないだろう。そう思いながら眠りについた。

それから一週間後の事だった。

知り合いのブティックが人手が足りないから手伝えないかと仕事の誘いがきた。

麻那加はこれから離婚するにしても、職があった方がいいだろうと思い、即承諾した。

亮にはメールでその事を伝えた。

あまり直接話したくなかったからだ。

何より反対されるのが嫌だったし、事後報告の文を送った。

亮の返信は『承知した』と賛成でも反対でもない言葉だった。

麻那加は久しぶりの社会復帰に気持ちが高揚していた。

ブティックなので、自分もそれなりの服装をし、キチンとメイクして、アクセサリも付けた。

高いヒールも久しぶりだった。

店では男女ともの商品を取り扱い、客層も三十代から四十代をターゲットにした店で、麻那加の年齢にはピッタリだった。

仕事は順調で麻那加も気分が紛れたが、亮との仲は相変わらずだった。

麻那加はこの仕事を本格的にして、ある程度自立出来る費用が出来たら亮に別れを切り出そうかと思いはじめていた。

店内で客に服のセンスを褒められると、麻那加は気分が良くなりさらに自分を磨き出した。

美容院に行き、エステにも行きネイルまで気を配った。

麻那加はまるで独身の頃のように若返っていく自分に満足した。

その日はブティックの仲間と食事をし、帰宅したのは亮より遅かった。

事前に分かっていたので、夕食の準備もし亮も承諾していた。

「ただいま」

「おかえり」

リビングを扉を開けるとソファーに寝転びテレビを見ている亮がいた。

その時、亮と一瞬目が合った。

麻那加は気にもせずキッチンへ行くと、洗い物がシンクに沢山転がっていた。

麻那加はエプロンを身に付け、すぐさまそれらを片付けた。

その間何度か亮の視線を感じた。

何だろうと思ったが、麻那加は気に留めず用を片した。

エプロンを外した時だった。

「麻那加、何時もそんな格好で仕事してるのか？」

亮が近寄って、麻那加の方をしっかりと見て言った。

「そうだけど」

「そうなんだ」

その後亮はまたソファに戻ってテレビを見出した。

麻那加は何が言いたかったのかサッパリ分からず首を横にして、浴室に向かった。

夜、寝室に入ると珍しく亮はスタンドを灯し読書しながら起きていた。

麻那加は不思議と思ったが、黙ってベッドに入った。

仰向けで目を閉じた時だった。

「麻那加…」

突然、亮が麻那加に話し掛けた。

麻那加は心臓が跳ね上がった。

「なっなに？」

麻那加は目を開け、亮を見た。

亮は本を閉じ、何時になく優しい目で麻那加を見つめた。

「仕事始めて、良かったな」

亮はそう言うと、スルリとベッドに潜って背を向けた。

麻那加は普段の亮らしくない言動に驚いて答える事ができなかった。

ブティックの仕事が思いの外順調で、パート時間からフルのシフトで働けるようになった。

麻那加ちゃんが来てから売り上げが伸びたとオーナーが喜んでくれて、益々やりがいを感じていた。

そんな事で朝は亮の朝食の準備と同時に自分も出勤の準備をしなくてはならなくなった。

朝からメイクして服も着替えて身支度をして、亮の出勤時間の30分後には自分も出勤だった。

パタパタと忙しく準備していると、亮は新聞を読みながら、麻那加の様子を見ていた。

「何か手伝う？」

麻那加は亮の有り得ない言葉に驚いて、一瞬固まった。

すぐに我に返り、「いい、大丈夫」と返した。

なんだか薄気味悪い。

私のやる事に関心なんかなかったのに...

麻那加はそんなふうに思っていた。

麻那加が働き出して4ヶ月が過ぎた頃、ブティックの十周年記念で、お得意様を招いてレストランで立食パーティー行われる日だった。

夕方、一度自宅へ戻り亮の食事の準備をして、カクテルドレスに着替えドレスアップをし終え、コートを着て家を出ようとした時だった。

玄関がガチャリと開いた。

「あ...」

「ただいま」

「おかえり」

丁度、亮が帰ってきた。

亮は麻那加をじっと見ていた。

「ごめん、もう行くね。夕食出来てるから」

そう言ってヒールを履こうとしたら、亮が麻那加の腕を掴んだ。

「何で行くの？」

「大通りでタクシー拾うつもりだけど」

「送ってやる」

「えっ悪いよ」

「明日、休みだから構わない」

麻那加は驚いたが、寒い中大通りまで歩くのも嫌だし、亮に送ってもらう事にした。

久しぶりに助手席に座った。

亮は黙って運転していた。

街はすっかり暗くなりネオンが彩りを加えていた。

「この辺りでいいよ。お店そこだから」

そう言うと、停車出来そうな場所に車を寄せ止まってくれた。

「帰りは何時？」

「えっ？帰りはいいよ。タクシーで帰る。亮だってお酒飲むでしょ」

「飲まないよ。迎えに来る」

「どうしたの？」

麻那加は亮の可笑しな行動の意味が分からなかった。

「どうもしない。」

亮は麻那加を見もせず言った。

麻那加は首を傾げて黙って車を降りようとした時、亮は麻那加の手首を掴み「何時？」とまた聞

いてきた。

麻那加は仕方無く「9時」と告げ車を降りた。

本当は何時になるか決まっていなかった。

しつこく二度も聞かれた事に少しの苛立ちを感じていた。

パーティーが終わったのは9時半過ぎだった。

店を出ると亮は寒そうにコートの手立てポケットに手を入れてガードレールに寄りかかって待っていた。

「ごめんなさい。遅くなって」と麻那加が言うと、亮は怒る事はなく微笑んだ。

コインパーキングに車は停めてあり、麻那加と亮はしばし歩いた。

二人の息は白く見えた。

自宅に着くと麻那加は急いで風呂を溜めた。

亮は直ぐに入るだろうと思ったからだ。

それから着替えようと寝室に向かった。

すると、後から亮が寝室に入ってきた。

麻那加は着替えるからと亮に伝えたが、亮は寝室から出て行かなかった。

麻那加は仕方無く、そのまま着替えようとカクテルドレスを脱いだ。

亮は下着姿になった麻那加に近づき後ろから抱き締めた。

麻那加は「やめて」と言ったが亮はやめなかった。

麻那加は亮の手を振り解いた。

亮は悲しい目で麻那加を見つめてから、寢室を出た。

麻那加はそのまま座り込み、静かに泣いた。

泣く必要はないのに、涙がポタポタと出るから寢室の絨毯に涙染み付いた。

どうしてこんな事になってしまったのだろう。

何時からだろう。

そう思えば思う程涙が止まらなかった。

夜、亮は既にベッドに横たわり、寝ているようだった。

麻那加は静かにベッドに入り込み、亮に背を向けた。

すると亮は起きていたようで「別れたいの？」と聞いてきた。

麻那加は少し間を置いてから「はい」と答えた。

それから亮は応答はなく静かに寢息を立てた。

翌日は亮は休日で麻那加も休みだった。

麻那加は一度は話し合わなくてはと思い朝食の後亮に話し掛けた。

「離婚の事だけど…」

亮はコーヒーを飲みながら新聞を読んでいたが、その言葉を聞いて新聞を閉じ折り畳み、テーブルに置いた。

そして麻那加を真っ直ぐに見た。

亮は「何故だ？」と問いた。

麻那加は何故かと聞かれるとは思っておらず苛立ちを感じた。

しかし理由を述べなければいけないのならこの際言ってやろうかと思い、とうとう口に出した。

「亮は私が拒絶するから浮気しているでしょう。
お互い愛が無くなっているのに一緒に居る必要はないと思う」

亮は悲痛な顔をして静かに話し出した。

「愛が無くなったのは麻那加だけだろう。俺は浮気はしていない」

離婚の原因を押し付けられて、浮気はしていないと否定までされた事に腹が立った。

「私見たのよ。夏前にカフェで女性といたじゃない」

亮は呆れた顔をした。

「彼女は後輩の嫁さんだ。あの後後輩が来た。仲人を頼まれたんだ。でも断ったよ。仲人が出来るような夫婦じゃないだろう」

そう言えば先々月亮は後輩の結婚式に出席していた。

亮は携帯で撮った披露宴を麻那加に見せた。

その写真の花嫁は麻那加がカフェで見た女性だった。

「麻那加は...どうして...」

亮は何か聞こうとしたが止めてしまった。

麻那加は浮気は誤解だった事が分かったがどうしてよいか考えられなかった。

しばらく沈黙が続いた。

「麻那加は仕事を始めて綺麗になった。明るくもなったし、かなりときめいてしまったよ。でも、もう俺を愛せないなら仕方ない、終わりにしよう」

亮は立ち上がり、リビングを出ようとした。

麻那加はとっさに亮の腕を掴んだ。

「行かないで」

亮の背に向かって小さく言った。

亮は振り向き、ゆっくりと麻那加を抱き寄せた。

「今日は寒いから、鍋が食べたい」と亮が言うと麻那加は「そうね」と言った。

次に「今は君を食べたい」と亮が言ったので麻那加は「どうぞ」と答えた。

END

2012.6.21作成

素直になれば

<http://p.booklog.jp/book/85826>

著者：キミイ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kimiynoheya/profile>

AKHTAR AHMAD 表紙Photo

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85826>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85826>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ